



51年北海道小樽市生まれ。高校卒業後、道立高等学校の教務助手として勤務する傍ら、夜間の保育専門学校を卒業。結婚を機に枚方市に転居。数々の障害者・保育・看護施設に勤務を経て、91年、映画「病院で死ぬということ」制作実行委員会参加が契機となって、新たな高齢社会を創ろうと決意、97年に大阪高齢者生協を設立、事務局長に就く。99年からは専務理事として、枚方の「ほっとステーション御殿山」をはじめ、府内4カ所の介護拠点を運営する。夫・娘、双子の息子の5人家族。

市民による 安心して暮らせる地域づくり

働くママのよこいび

北海道の小樽の生まれです。子どもの頃は児童劇団に所属していて、将来は新劇の女優になるって決めていました。中学校3年の時に、母親が倒れて、それが引き金になって、10代は結構荒れた生活をしていました。そんなんじゃない、って親戚が高校の教務のバイトを紹介してくれて、曲がりなりに初めて「教育」の世界に出会いました。

日本の地域が危機を迎えています。社会保障のシステムが揺らぐその中で、自分たちの力によって地域を再生させようとする試みがあります。大阪の各地で介護拠点を展開、高齢者自身が地域に経営参加するワーカーズコープ、大阪高齢者生活協同組合の専務理事岩浅えり子さんにお話を聞きました。

当時70年代は、若者はみな向学心に燃えていました。何になりたい、という明確な目標があるわけではないけど、とにかく上の学校に行って勉強がしたかった。私も定時制の高校を卒業して、その後札幌の保育の専門学校に入りました。

当時は学園紛争がまだくすぶっていた時代で、保育の学校でもいろんな議論が渦巻いていました。たくさん先輩にも恵まれました。そこで得たのは、「自分の生き様そのものが子どもたちに伝わるんだ」という、保育者としての目覚めのようなものでした。

いま思えば元気だったんでしょね。専門学校で自治会の委員長をやって、全学連に加盟して、そしたら、全学連の本部から東京へ来ないか、ってスカウトされて。東京での2年間は、必死でしたけど、新聞の編集とか地方の巡回とか、お給料をもらっていろんな仕事をさせてもらった。20代のはじめでしたけど、社会のために「働く」って楽しい、と感じた最初の経験でした。

私たちは自閉症の子どもと同じものを見ることはできません。でも、同じ目線に立つことはできる。子どもが何を見ているのか、その視線の行方に、ずっと意識を凝らしてきたような気がします。

もちろん、世界は子どもだけで成り立っているわけではありません。人には必ず背後があって、親や家族の存在があります。もちろんそれが救いにもなることもあるけど、逆に大きな障壁になってしまうのも事実です。だから、私はそばに「安心できる人」がいることが大事だと思う。親や保育士だけじゃなくて、地域全体が大きな安心を届けることで、子どもは成長していくんだと思います。

専門学校以来、25年を子どもと生きてきましたが、私が学んだことは、「人はかかわりの中で生きていく」という真理でした。

「これからの高齢者が地域を変える」

いま子どもから高齢者の仕事に移ってきましたが、根底はまったく同じです。「弱い」とされる人がいても、それは絶対の弱さでなく、社会によって作られた弱さで

そばに「安心できる人」がいる

社会人になって、ずっと子どもにかかわってきました。最初は心身障害コロナー、それから公立の保育所、学童保育の指導員もやりました。

当時自閉症の子どもについて、ようやく社会の認知が広がってきた頃で、私も何人もの子どもたちとかかわってきました。言葉の出ない子どもが、絵を描くことで、長い時間をかけてだんだん自立していった経験もありますし、一言で言う、「弱い」とされる人たちから、たくさんのお話を聞きました。障害を持つことが不自由なのではなくて、それを理解できない回りの心の障害の方がもっと大きな問題だということを感じさせられました。



▲コロナー勤務の際の遠足での1コマ (中央・岩浅さん)

あることが多い。最初から弱いのではなくて、自立や努力する機会を奪われていると、思う。そういう意味では、いま日本の地域は人がお粗末にされていますね。

でも、いま私は高齢者生協の活動をしています。いろんな生活支援の福祉事業を通して、小さな動きだけでも、まだ地域は変えられるとも思っています。昔地域はただのエリアでしたけど、いま地域が人になって、また地域にかえる。私たちの生協の立ち上げ時も最初は地域がよく見えない。そこに集う人たちがイコール地域だった。それが何年か活動を続けていくうちに、だんだんいろんな地元の人を巻きこんで、またエリアに還っていく。でも最初の無関心なエリアとは違うんですね。意思が通い合って、地域もまた生まれ変わっていく、と思います。

地域を変える鍵は、これからの高齢者だと思っています。余生は遊んで暮らす、ではなく、職業生活で培ったものや特技をいかに社会に還元していくのか。日本の保障システムが壊れていく今だからこそ、人生の高齢期をどう生きるか、ぜひ考えてほしい。

「自分は何のために、誰と生きていくのか」という問いこそだいじだと思います。



第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art your self"とは

会期：2005年11月25日（金）～12月17日（土）

会場：大阪府立現代美術センター 展示室A・B、ほか各NPO活動拠点

現代美術を通して大阪の姿を世界に向けて情報発信し、大阪の都市魅力の向上をめざすため大阪府立現代美術センターが主催となり毎年開催している大阪・アート・カレイドスコープ。当倶楽部は第2回から企画、協賛事業「out・in展」を開催し、ジャンルを超えた若手の表現者が交流する場をつくった。

第3回展である今回は、「Do Art Yourself」と題し個人が、生きること、働くこと、遊ぶこと、学ぶことなどを「アート」として捉え直すことで、それまでとは違う目線で物事を考える機会を提供するとともに、それぞれが生きる環境をそれぞれの方法で「耕し」「肥料を与え」「育てていく」ことをテーマとする。メイン会場である大阪府立現代美術センターを仮設・仮設の「アートセンター」とみなし、ここを訪れる人が多様な「アート」と出会い、さらに様々な哲学、知識、アイデア、人との結びつきなどのツール（道具）を獲得することのできる場の創出をめざした。

そして大阪で活躍する8つのアート系NPOが「大阪アートNPOコンソーシアム」※を組織し、その企画・運営を担った。各NPOには、メイン会場と各活動拠点の2会場で計2つ以上の催事を行うことと、また、メイン会場でダイアログと称するトーク

プログラム2本を開催することが課題として与えられた。それぞれが企画をもちよるため開催期間中、ほぼ毎日のようにメイン会場と各会場で多発的にアートイベントが開催されたのである。また、日々実施されるダイアログはテキスト化されて、翌日にはニューズレターとして発行、ダイアログに参加していなくても記録として蓄積されたものを読むことで、期間中の動きをつぶさに知る事ができた。

そんな新たな試みにあふれた今回の大阪・アート・カレイドスコープ事業で、コンソーシアムの一員として、應典院寺町倶楽部をどう位置づけることができるのか。はたして当倶楽部がアート系NPOか？最初にオフアアを受けた時には、そんな問いがたち現われ、すべからず「なぜうちなのか？」とたずねた。いわく「全体のバランスで多様性を確保するため」とのこと。では多様性のひとつとしての應典院寺町倶楽部って？他のアートNPOとは異なる持ち味って？企画段階で、自問自答が始まる。ここ数年は地域に根ざした交流活動にも力をいれてきた。またアートに特化した活動というより、アートを通してさまざまなつながりの場を創造してきた。ならば目指す方向性は、やはり大阪の中央に位置する上町台地に属する應典院からこの地域の魅力を発信しつつ、

願わくば参加者が主体となり地域から何かを学んだり、交流する場をつくることではないか。

そうして「ひと」「自然」「歴史」の3つのキーワードを掲げ、普段見過ごしてしまっている町の魅力を自ら発見する3つの企画が立ち上がった。

「ひと」から、上町台地で職を通じ創造的に生きている人をクローズアップした「自適人の肖像」展が、「自然」から近年歩くことを通じて地域の風土や慣習を掘り起こし、作品制作をする美術家・大久保英治氏を招いた「遊行のフォークロア」上町台地・境界を歩く展が、そして「歴史」から戦後60年の2005年、戦跡をはじめとする町に埋もれた歴史の遺産を自ら発見していく「アートなまちの探検隊」がそれぞれ生まれた。

今号は大阪・アート・カレイドスコープを特集し、應典院寺町倶楽部がコーディネートした3企画について報告する。それでは、次に各企画についてみてみよう。

※大阪アートNPOコンソーシアム 構成8団体

①NPO法人大阪アーツアポリア / ②應典院寺町倶楽部 / ③特定非営利活動法人キャズ(CAS) / ④NPO法人こえとこいば / ⑤NPO法人DANCEBOOK / ⑥NPO法人Beyond Innocence / ⑦NPO法人記録と表現とメディアのための組織(Temo) / ⑧NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト(Recip)

アートなまちの探検隊 報告 (寄稿)

2005.9.3 (應典院)・10.30 (結)・11.13 (應典院)

まちの彩りを紡ぎ出し発信する意味・意義

「アートなまちの探検隊」プロデューサー 山口洋典 (上町台地からまちを考える会事務局長)

1 探検隊による上町台地の魅力への接近

探検隊という響きに、何か奥深さを感じるのには私だけだろうか。グリーンズやインディーズジョーンズなど探検を素材にした映画を挙げれば枚挙にいとまがないが、特に思い出すのは幼少の頃、「探検隊」という名が冠されたテレビ番組(言うまでもなく、川口浩探検隊である)を見て、同級生たちと学校やそれぞれの家の周りを見て回っていたことである。学校や家の周りは、小学生や中学生の当時、あまりに身近な環境であった。しかし、そうした生活圏の見慣れた風景に、懐中電灯を携えた顔見知りの集団が、リーダーなど役割を定めてあえて仰々しく探検した記憶

は、今でも飲み会の折、欠かすことのできない昔話として私の悪友のあいだで伝承され続けている。

探検というからには、何かを明らかにする必要がある。探検をある辞書(明鏡国語辞典)で引いてみれば、「未知の地域に踏み入り、実地に調べること」とある。無論、この定義を見つめてみれば、何かを明らかにする営みに、研究ということばが充てられたとしても齟齬はないだろう。しかし、冒頭より述べてきたように、探検ということばには、テレビや映画の世界に身を置くような、文字通り探求心をくすぐる魔力があると言えるのではないか。

今回、アートカレイドスコープにおいて、應典院がまちづくりの観点から取り組んだのは「アートなまち」域資源としてまるごと取り扱ってみれば、より未来志向で過去の行為とその結果を取り合うことができるのではないか、と考えたのである。

企画の大枠が定まったのは2005年7月のことであった。当初は「戦跡巡り」を行ってはどうか、という意見もあったが、それを躊躇させたのは、2005年の春に読売新聞社などが作成した上町台地ガイドブック「上町を歩く」であった。有料の地図ではあるが、名探偵コナンの登場人物を起用した上、明るい基調の構成で、使い勝手がよさそうな地図とまち歩き副読本のように仕上がっていたのだ。そこで、あえて「戦跡巡り」とせず、身近な環境において普段は意識することのないもの、こ

を明らかにする探検であった。「アートなまち」に見立てた探検先は北は大阪城から南は天王寺駅周辺、東はコリアタウンから西は松屋町筋周辺で囲まれた上町台地境界である。例えば大阪市は、大化の改新以来、脈々と歴史を紡いできた上町台地を「歴史の能舞台」に見立てており、上町台地上に位置する應典院もまた、その能舞台において、未来に向けた物語を生み出す担い手の一つであると言って間違いはなからう。

本稿では、この秋に取り組んだ「アートなまちの探検隊」について、その取り組みの経緯と経過、具体的な取り組み内容とその体制について述べる。そして、今回の取り組みの成果と課題を整理し、上町台地境界の魅力を探求する企画の意味、意義に

2 経緯と経過

ついでとめる。なお、本稿は、「アートなまちの探検隊」のプロデューサーを務めた山口(上町台地からまちを考える会)が主に執筆し、ディレクターを担った田中(應典院)とともに推敲を重ねたことを記しておく。

「アートなまちの探検隊」は、應典院が戦後60年という区切りによつてどのように向き合うか、という問いに対する答えを探るなかで生み出された枠組みであった。歴史資源にあふれる上町台地には、数多くの戦争関連地域資源が遺っている。それらを負の資源として指摘することはそれほど難しいことではない。しかし、それらを否定も肯定もせず、まずは地

と、ひとに目を向ける「探検」のこ
とばを掲げることにしたのである。

「アートなまちの探検隊」には「上町台地アート・ツーリズム」という名がつけられた。ここでのアートとは、いわゆる「芸術」ではなく、より広く「表現」全般を意味する。つまり、多彩な魅力にあふれたまちの「彩り」に触れ、また探検隊員の個性や関心もまた十人十色の彩りにあふれてほしい、という思いを込めて名付けさせていただいた。無論、この名前を用いるにあたっては、共催団体として関与した「上町台地からまちを考える会（以下、考える会）」も無関係ではなく、2003年より考える会が事業の柱のひとつに掲げていた「アート・ツーリズム」の冠をそのまま本事業にも付与させてい

ただいた。

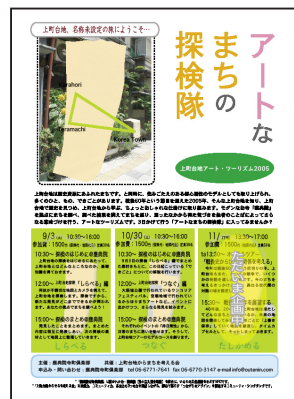
そうして形作られていった企画は、8月4日、モンゴル声明（しよみょう）のコンサートを契機に周知を開始した。3回連続の企画ではあったが、3回目は「ただいま計画中」という、時折見かけるホームページのようなチラシであったため、いささかの不安を抱いての事業開始となった。それでも、裏面に著させていただいた企画趣旨や、第一回目の「案内人」の魅力に加えて、その見切り発車的な「ノリ」が人々の関心を惹いたのか、会場や自転車の調達台数の枠組みに程よい人数が集まることとなった。次節より、具体的な内容等を紹介していくこととしよう。

自転車で「まち走り」をする3回連続の企画には、それぞれ「しらべの編」（9月3日）、「つなぐ編」（10月31日）、そして「たしかめる」編（11月13日）と名付けられ、単発で参加しても楽しめるが、通しで参加すればより探検の意義が深まるような企画を織り込んだ。「しらべの編」は寺町界隈、空堀・コリアタウン界隈、大阪城界隈の3つの組に分かれて、インスタントカメラを手に貪欲に「おもろい」地点を収集することとした。「つなぐ」編は、前回に収集された地点情報を補足するために、出発前にそれぞれの地点情報を地図で確認した上で、どのような順番で回るのが効率的で効果的かを考えてまちに出た。「たしかめる」編は第1回でも招いた案内人としてのゲス

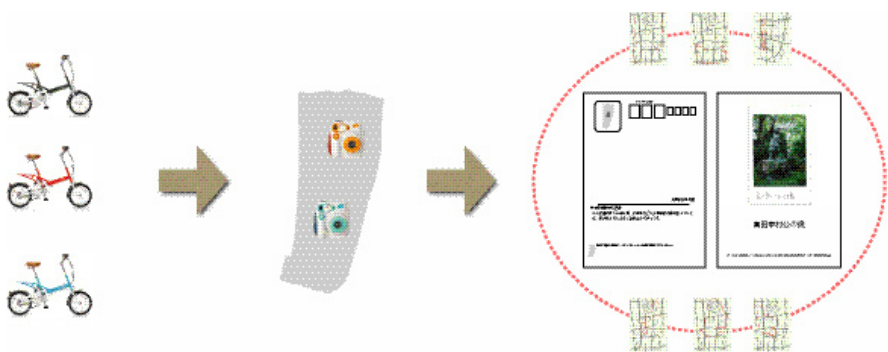
ト、小田切聡さんをご意見番に、前の2回で収集された情報と、上町台地の探検経路を机上で整理した。今回の企画で特筆すべきことは3つある。まず、デジタルカメラや携帯電話のカメラ機能がすっかり人々の手中に収まっている今、あえてインスタントカメラ、つまりポラロイド式を用いることにより、限られた枚数を有効に使うことを考えながらまちを探検するということである。次に、まちを巡るにあたって、詳細な地図から手書きで写図（トレース）した実に不親切な地図に参加者が情報を書き加え、それぞれの組ならではのものに仕上げつつまちを探索して、結果として巡った軌跡が地域観光の一見本になるということである。そして、それぞれの組には各

3 具体的な内容とその体制

上町台地は起伏にあふれている。台地という名が付くゆえんである。天王寺界隈の七坂には名前も付けられている。通常、地域を散策・探索することには「まち歩き」と言われるものの、起伏にあふれたまちを探索するには自転車が妥当だと考えて、西代官山クラブ（上町貸自転車）の協力を得、「まち走り」を行うこととした。



▲仮チラシのような本チラシ



▲「アートなまちの探検隊」の「探検」スタイル

自転車でまちを走り、ポラロイド式カメラで撮影した後に、成果物としてルートマップと紹介カードを作成。

回ごとに企画から携わる人材が1名以上参画させていただき、リーダー、記録、撮影以外の要員として、さりげなく「やらせ」の演出に携わったことである。

開催にあたって、考える会の協力を得たことは前述したが、それ以外にも過年度の應典院のインターン（唐沢さん）、京都大学高田研究室の院生のみなさん（木村さん、高間さん）、大阪大学渥美研究室の学生さん（清水さん）など、上町台地に明るい学生たちによって探検隊には彩りが添えられた。決して上町台地に居住しているわけではないが、学びの過程をとおして既に「ほっとかれへん」まちであり、一言何かを言いたくなってしまう、そんな学生たちが参加者の皆さんの探検心をくすぐ

3回目の「たしかめる」編では、絵はがき状のカードの試作品に、参加者のみなさんがそれぞれの思いを書き込んで、実際「その場所」に投函できる手紙を執筆する、という時間を設けた。われわれはまちから情報を略奪し、勝手に絵はがき状に取りまとめさせていただいたのであるから、それをもう一度現場にお返ししよう、という意図である。

まちの記憶、あるいはまちそれそのものは、そこに住まい、働き、学び、そして遊びにくる人々によって息づくものである。言うならば活気あるまちには、多くの人々によって新たな物語が紡ぎ出され続けている。これを、まちの物語の「上書き保存」と喩えてみよう。すると、無意識のうちにもまちの物語を「上書き保存」

ったことであろう。無論、こうした「ハイブリッド」な構成での探検隊と、その探検内容をうまく取りまとめていただいたのが、應典院のスタッフであった。事前学習を行って、まち走りに出発し、現場で素材を収集して、戻ってきた後に各地点の素材をカルテにまとめて、最後に巡った軌跡に物語を創出させていく、一連の実践は、それ自体がまちの探検隊という協働的实践としての現代アートであった。

4 実践の成果と課題と展望

本企画は戦後60年をゆるやかにひもどくことを当初の趣旨にしていたが、同時にそれらをまちづくりを観点にして取り組まれた現代アートの

しているわれわれは、未来の視点に立ってみると、万葉集や古今和歌集にある「詠み人知らず」の歌を無数に生み出しているとも言えるのではないか。

来年度も何らかのかたちで続けたい。そういう思いが主催者にも、そして参加者にもある。そして、企画者として携わった私は、主客が逆転して一番楽しませていただいた参加者かもしれない。2006年、おそらく戦後61年と呼ばれることはないが、ある区切り年という都合の良さを引き合いに出して、また一つ、「詠み人知らず」のまちの物語を紡ぎ出す機会を生み出したいと画策中である。

実践であった。自転車で探検することとおして、普段何気なく触れているまちの歴史に関心を抱き、そしてまちの風景の中に見つけ出した歴史の痕跡をインスタントカメラによって切り取る。その際、予め手渡された不親切な地図が日常生活の記憶を思い起こさせ、空間と時間の両面から「まちの物語」を探る。そうした辿った軌跡がまちをめぐる「モデルコース」となる。ここまで記してこなかったが、今回まとめられた地情報情報は、既に100枚を超える絵はがき状のカードとしてまとめられている。

アートなまちの探検隊は、この3回で終わらない。実践をとおして遺された絵はがき状のカードが、新たなまちの資源になったためである。



▲「アートなまちの探検隊」の「探検」による気づきのシステム
事前に周辺界隈を学び、大まかなルートを整理することで、思わぬ発見に出会い、戻った後の物語が多彩になる。

自適人の肖像展

2005.12.5～12.17 (大阪府立現代美術センター)

出会いから、表現・地域・仕事を問う

(取材・文 編集部)

大阪府立現代美術センター展示室Bを会場に12月5日～17日まで開催した「自適人の肖像」展。5人の作家が5人の上町台地で自分らしく働く人にインタビューし、触発された「何か」を作品化するというのがコンセプトだ。「人間と仕事」、「技とアート」を結びこのユニークなプロジェクトをふりかえる。

地域で働く人を紹介

上町台地は、医療、福祉、教育、宗教、行政機関などが多く集積している。多種多様な施設が集まる地域には、さまざまな職種が存在し、また職種以上に多彩な働き方をする人たちが集まっている。ここ数年、「上町台地からまちを考える会」との協働事業をはじめとする地域に根ざした活動から、上町台地で創造的に生きる人たちとの出会いが増えてきた。

時間を切り売りするのではなく、自分の立ち位置で仕事を通して学んだ知恵や知識を形にし、社会に還元しようとする人たちが。

地域に目標となる「働く大人」がたくさんいることは若者に夢を与える。それなら、私たちの知っている上町台地を舞台として魅力的に働く人々をクローズアップし、アートを通して紹介してみようということになった。



自適人と作家

ここに強力なパートナーと巡りあう。美術家、美術大学の講師、古典芸能を現代的な切り口で紹介する舞台プロデューサーといくつもの肩書きを持つ伴野久美子さんにプロジェクト全体のプロデュースをお願いした。経済専門紙の記者などの職歴も持ち、アートと仕事を結び展覽会に伴野さんの視点は息づいてくるのではないかとの期待がふくらむ。かくして、仕事人に作家がインタビューし、触発された「何か」を作品化するという「自適人の肖像」展のコンセプトが生まれた。魅力的な仕事人を「自適人」と命名し、自適人と出会った作家がその生き方を自らの表現の中に落とし込んでいくというものだ。

自適人としてご登場いただいたのは、5人。うえまち貸自転車代表・小田切聡さん、長安寺副住職・佐藤潤宏さん、株式会社徳山物産会長・洪呂杓

さん、大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学・医師の山口悦子さん、大阪市立大学医学部・庶務課広報担当の平井祐範さんである。(以下敬称略) それぞれ、小田切×吉野晴朗(写真家)、佐藤×あまのしげ(美術家)、洪×持田総章(美術家) + 山田友子(美術家)、山口+平井×田村正樹(美術家)の自適人と作家の組み合わせで、まずはインタビューを実施した。

インタビューの経緯

8月から10月にかけてのそれぞれのインタビューの内容を紹介しよう。(展覧会配布資料より抜粋)

●小田切聡×吉野晴朗

8月12日 地下鉄松屋町駅下車15秒、「うえまち貸自転車」へ。上町台地界隈をゆっくりに自転車で巡ってほしいと小田切さんが2003年にオープン。それ以外にも大阪

のまちのプロモーション事業を多角的に展開。イベント仕事に急遽、小田切さんが駆けつけねばならず、からほりく道頓堀道中話を聞きながら移動。知られざる大阪の一部を発見し感心しながら歩いた。時にイ



→小田切さんと吉野さんとの協創作品

「小田切さんの上町台地」

ンタビューを忘れ、おのぼりさんになって風景に夢中になる一行に「車が来ますよ」と安全管理も抜かりない。小田切さんは應典院寺町倶楽部主催事業「アートなまちの探検隊」に、上町台地の隠れた魅力を掘り起こすフィールドワークとレクチャー講師としてご登場。吉野さんも探検隊員として参加。3度にわたる体験型の取材となった。

●山口悦子×平井祐範×田村正樹

8月17日 大阪市立大学医学部附属病院小児病棟へ。田村さんは幼い頃に長期入院を体験、「行動範囲が狭く無機質なのが病院のイメージ。看護師さんの優しさが記憶に残っている」と。この小児病棟では2000年から、アーティストを招いてアートプロジェクトを展開。いろんな大人と「ものごと」に出会うきっかけをつくっている。「長期療養の子どもたちにとって、病院は日常生活

活と成長の場。取り巻く人間が作る環境の良し悪しが大切。子どもに関わる「まち」の大人として、子育てを無視できない」と山口さんは語る。安全、管理に人一倍気も使う病院が舞台、導人は大変だったのでは？



↑山口さん・平井さんと田村さんとの協創作品
左：「050826」・右：「050720」

平井さんは病院内外の広報担当として尽力、「小児病棟だけではなくて病院全体で取り組むという意識をもってもらうことが大事。だから仲間づくりとおもしろいと思ってもらうことがより。」
子ども小さな社会を大きな世界に広げる試みを大人が率先して取り組んでいる。

●佐藤潤宏×あまのしげ

8月22日 地下鉄谷町九丁目駅から徒歩5分の城南寺町へ。「父の仕事の関係でこの周辺には馴染みが」という、あまのさんと連れ立って、子ども地蔵盆の準備中の長安寺に。

佐藤さんは副住職のかたわら、NGO「国際子ども教育基金」と協力し、アフガニスタン首都カブールの難民の教育支援を続けている。難民キャンプに出かけ、母子のための読み書き教室やミシンを提供し、洋裁などの職業訓練の機会をつくる活動だ。そ

の資金は大阪市仏教青年会と協力し、大阪で開催するじゅうたん展示販売や写真展などの売り上げがもとになっている。「子ども頃は、花まつり、地蔵盆などには地域の人が集い昔の話をしてくれたものだった。

た。先祖供養以外での社会貢献がなかったし、人とも出会いたかった。副住職の今の立場だから自由に活動ができる」町の変遷はお寺と地域との関係も変化させた。

●洪呂杓×持田総章

10月13日 JR鶴橋駅から徒歩12分、御幸通商店街の班家食工房へ。洪さんは和歌山生まれの在日コリアン2世。2003年11月に「班家食工房」を立ち上げる。

近年、コリアタウンには、小中高の学校単位のまちの見学者や歴史を知りたいと訪れる人が増加、実際にはゆっくり話す場所もなく、雨ざらしのなか話を聞く子どもたちの姿を気にかけていた。

「韓国の伝統文化や古典、食文化に触れ、感じ語り合えることのできる広い場所があれば」と思い続けた念願の施設だ。1階の入口には韓国食材を、奥には伝統の家具、衣装、生活用具、工芸品などの「韓国の文



↑佐藤さんとあまのさんとの協創作品

「16」

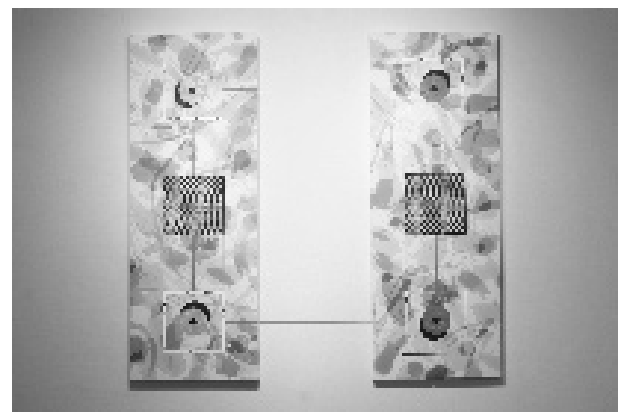


↑洪さんと持田さんとの協創作品

「75の存在」

化」を紹介。広い空間を休憩できる場として無料開放、文化教室も開設する。ここから次代の若者が自分の国の文化、ルーツに誇りを持ち、互いの違いを認め合う「共生社会」が築かれていくことを願っている。

じつは洪さんの息子さんは山田さんとも天王寺美術研究所に通い、デッサンも学んだ仲間だったことが、インタビュアーを通じて判明！人のご縁に感嘆させられた。



→ 洪さんと山田さんとの協創作品
「あなた、そして…」

出会いからはじまる表現

インタビュアーが作品となって大阪府立現代美術センターB室に展示された。この展覧会を通じた感想を作家から聞いた。



「普段、会うことのない人との出会いが新鮮だった。美術のなかの美術でなく生活の場に開放したいと思っていたので、展示室にイスを置き、語らう場を作ってもよかった。私自身は新興住宅地に住んでいるので、上町台地の歴史や伝統に羨望をおぼえた。自分が暮らす土地に愛着と誇りをもつことのできる思いがうらやましかった」(田村)

「取材される方々の情報が会場で簡単に伝えられるだけなので、観客の人が仕事人のイメージをそれなりに膨らませないまま、眼の前の作品を鑑てしまうことになり、実際には作品から自適人をたぐっていくことになっていくでしょう」(吉野)

「関係性を見つけていく作業だった。自分の仕

事、人間について考える、イメージするというその作業が楽しかった。普段、抽象作品を作るときは意味性を排除し、直感が頼りだが、今回は意味づけをしながら作った」(あまの)

「いままし、従来の展覧会の形式を超えることができたよかったです。地域の人々と作品について、美術について会話をもちたかった」(持田)

「自適人の方々と作家が展覧会場で直接対話できたらより深い思いが心に残ったのでは」(山田)



作家と自適人の出会いと深い対話の機会を生み出すことが始まりであったが、会場に訪れる人同士の、また作家との語りあいの機会をつくることができたなら、仕事や地域、またアートについての深い対話の場がさらに生まれたことだろう。

普段アートの接しない人とアートを語りたいたいという作家の思いは、関心者のみに閉じこもりがちなアートを開きたいという願いからきてい

るにちがいない。その願いは、非常に重要ではあっても案外日常的には語られない「地域と仕事」をテーマとしたことから、より一層深くもたらされたものではなかっただろうか。「自適人」に共通しているのは身の周りの問題を社会の共通課題とと

らえ創造性を発揮して解決に導いていることだ。地域や身近な足元に目を向けて、各人が蓄積した知恵や経験を仕事にいかしている。それは、まるでその人にしかできない表現のようだった。自適人が仕事という舞台の表現者となれば「自適人の肖像

展」は表現者どうしの出会いから生まれた展覧会であったといえる。地域、仕事、表現とひとくちでは語りえないテーマを少々欲張りに盛り込みつつも、出会うことから始まる表現の豊かさは見る人を感じていただけたのではないだろうか。

「自適人の肖像展」私感

伴野 久美子

「自適人の肖像展」プロデューサー



← 伴野さんの作品
「自適人の肖像展を表す」

展覧会会場で伺ったことや、アンケートを読まさせていただいて、「自適人の肖像展」を通して、私を感じたことを記させていただきます。

1、作品を見ること。

「動く」要素のある身体表現や映像表現が多かった、「第三回大阪アート・カレイドスコープ」において、「動かない」美術作品と対峙する本展は、美術（現代美術）に馴れていない方にはとまどいもあったようだ。

美術作品は、作家が沈黙考した結果が、一瞬に凝縮されている（時空を限定するので、永遠ともいえる）。観手は、自分から作品に近づく（心を寄せる、考える）ことにより、作品を感受することができる。

2、仕事を考える。

仕事を考えるというのは、生きることを考えること。大人にとっては「仕事をする」ことが日常だが、私が構想したのは美術版「ソフィーの世界」。作品だけでなく、作家とモデルになった人たちの資料を、とくに若い人が熱心に見てくれたのが、その評価。

美術のタイトルでよくつかわれるWorksは作品の意味だが、働くことでもある。本展の手法は、今後も可能性が広がる。人（仕事）の数だけ、作品もできる。その作品制作ジャンルも美術に限るわけではない。

3、現実と非現実

作品は現実に在るものだが、それが作り上げる世界は概念の世界（非現実）。本展は、光と闇、野外空間等の展示が、多くの方をイリュージョンの世界に誘ったようだ。ただそれに気づかなかった方もいて、どこまで、どのように案内するのか、今後の課題である。

※ランドアート：1960年代末のアメリカで発達した、自然を直接の制作素材とする表現様式。

本堂ホールを中心に、展示されたインスタレーション。竹と石、砂など自然素材を使った作品は、日本のランドアート※の第一人者といわれる大久保氏ならではの作品。ランドアートは、本来屋外で、自然の素材を使い、自然と対話しながら、環境や場所との関係性をも含めて作品を創りあげていくものだ。大久保氏は言う。

本堂に創りあげられたその作品は、本堂という場所の特異性とあいまって、宗教的な意味さえ感じている。特に、竹に囲まれた真ん中に「立つ」石は、本尊と対峙し、まるで仏像の原型によく似ている。

展示会の期間中、大久保氏が石を立てることから一日が始まり、一日の終わりには石を寝かせる。それは、まさしく修行の中の毎日の儀式だ。

自然観を問う

本来、自然の中で作品を創作することの多い大久保氏。本堂という宗教空間に創りあげられた今回の作品には、どのような意図があったのだろうか。

秋田●大久保さんはランドアートの作家ですから、自然あるいは自然観と作品は切っても切れないかわりがあると思つのです。

仏教の言葉に、『山川草木悉皆成仏』という言葉がありますが、あらゆる自然には仏となる生命が宿っている。そういう壮大な生命観というものを、私たちの先人は描き出してきた。それは、そして日本独自の感覚ですね。

大久保の作品の大半は山や川の畔、海辺で展開されていくもの。ランドアートという自然に対峙していくその創作と、いま日本人が死に臨むときでさえ自然に向き合おうとする感覚というのは、どこ

かで重なるものがあるんじゃないだろうか。

遊行ということとともに、大久保さんの自然観というものも、ぜひうかがいたいのですが。

大久保●たしかに私たちは自然の中で、森とか山へ行くと一種の畏敬の念が生まれてきます。何でもないことのようにですが、これはかなり特異な感覚かもしれません。

それはキャンプに行くとか、そういうのとは違って、より自然を知ろうとか、植物に直接ふれてみたいという気持ちをもっている。自然に対して、ごくあたりまえに畏敬の念が生まれ、頭を垂れるという気持ちになるものです。

それは日本人の独特の感性かな、とも思つわけですね。

秋田●生きとし生けるすべてが仏になることができるということが、仏教を仏教たらしめている大きな特徴だと思つのです。つまり、人



アートとスピリチュアルの交錯
 140kmの彼方に見えたもの

「遊行のフォークロア～上町台地・境界を歩く」は、2005年12月7日から13日まで大阪・アート・カレイドスコープの一環として現代美術作家・大久保英治氏を招き行われたアート・プロジェクト。

期間中、應典院本堂に大久保氏の作品を展示しながら、毎日2回、プロジェクト参加者が下寺町界隈を大久保氏と歩き、期間中歩いた歩行距離は、延べ140kmに及ぶ。

歩くことは果たして美術なのか？ 12月11日に行われた、大久保英治氏と秋田光彦主幹のダイアログの様態を交えながら、プロジェクトをふり返る。

(取材・文 編集部)

歩くこと、人智を超えたものと出会うこと

(財)大阪都市協会 編集出版部長 北辻稔さん

歩くことに関心があります。早朝30分の散歩は日課ですし、写真を撮りながら山歩きもしているので、歩くことをテーマとしたこの展覧会はおもしろそうだと思います。

実際に遊行を体験し、発見したことが2つあります。ひとつは、歩くスピードと思考には関連性があるということです。普段の散歩では雑念がわいて、そのつもりがなくてもいろいろものを考えてしまいます。意外とものを考えないで歩くということがない。反対に早すぎると息があがり、訓練のように肉体的にしんどくなります。早足の大久保さんの歩きは、ものを考えさせないですね。千日行の山伏のようにただひたすら歩く。あのスピードは雑念がわいてこない、考える余裕を与えないスピードなのだ。想念がわいてきて思わず立ち止まってしまうような歩きと、思考の頭脳パターンには合わない歩きがあるということがわかりました。

もうひとつは、アートの経験が歩くことを通じて可能だということです。そう気づいたきっかけは、茶臼山周辺で大久保さんが拾った木の葉でした。わたしも山歩きで押し葉にして持ち帰りますが、多くは虫食いのない形の整った美しいものです。けれど大久保さんは踏まれて、わたしたちはきつと気に留めないような一見みすぼらしく映る葉を選びました。記念に持ち帰るという感覚とは違います。そのなかに「何か」を発見されたのでしょうか。今までにないコンセプトとか感覚、美しさを発見すること、それがアートですよ。作品を作るということではなくて、一般的に美しいというものではない何かを新たに見つけていく行為、歩くことがアートになるとはこういうことかと思いました。

山歩きで山奥に行くとか何かにおびえたり、恐怖心を思い起こさせてくれます。疲れて身体も感じやすくなっているのか、「人智を超えたもの」と出会うかもわからないという期待感が生まれます。仏と出会う経験に似ているかもしれませんね。わたしたちはできごとには原因と結果があって、すべてを理論的に、科学的に追究しようとしてしまいがちです。でもそれをやってどうなん？と思うことがあります。単に事実関係がわかるにすぎません。そんな普段は忘れていた何かを畏怖する感覚、自分の中にある霊性といったものに気づく仕方を与えてくれるのがお寺ではないでしょうか。芸能発祥の場であり、かつては集会所や癒しの場でもありました。ですが今は、先祖供養の儀式で行くことはあっても、なかなか足を向けることがないですね。そこを誰もが出入りできるように、今の人が忘れていた感覚をよみがえらせるような切り口でアプローチし、芸能の発祥の場であるその機能を再生しているのが應典院だと思っています。

遊行で歩いた下寺町—茶臼山—四天王寺—鶴橋を巡る午前ルートは、上町台地のもともとの起伏を感じさせる格好のコースでした。またあらためて歩いてみようと思います。

イの社会のとても魅力的なところだと思つたのです。私たちがものすごく過剰な社会に生きていて、物だけじゃなくて、情報なども非常に過剰です。それをいったん捨てるという体験は、よほどの覚悟と状況を作らない限り作れない。寺に行く、出家するということをひとつの制度にしながら自らそぎ落とした中で、ミニマルなものに出会っていくというタイ人の生き方に関心と興味を覚えます。

秋田●最小限度というのは、違ういい方をすれば、過剰なものを取り払うということでもあります。仏教国タイでは一時出家制度と

ライフスタイルそのものが、ものすごくミニマルってところはないですか？大久保●いや、そこまでではなく、聖なる生活をしているわけではないので。でも、考え方としては、そういうものに憧れて、できるだけ

ヨーロッパで最近かかわった作家の中には、ひとつの森に入っただけで、自分が考えている形とか、コン

だ、自分自身のこととしては、自然の中に、自然のこのように、溶け込ませるといふあり方がいっぱい好きであるといえます。

というのがあります。男性だけの制度ですが、だれでも3週間、僧院生活ができるという権利が与えられています。俗社会と完全に離れて、期間が過ぎればまたもとの生活に戻っていく。つまり、世俗の社会と聖なる社会が切れているんじゃない、つながっているのがた

間は皆、また命あるものは、仏というものをあらかじめ私の中に抱えている、私は仏になる才能を持っているんだ、ということなんです。そのことと、畏敬の念を覚えるという大久保さんのいう自然観とは、ぼくにはほぼ同義に思えるわけです。

大久保●西洋の自然観とわれわれの自然観の違いというのは、たとえば彼らが日本に来て作品を創るとき、彼らは山にある木に平気で釘を打つわけです。そこに木を渡して、台座を作り、高い場所で作業をする。それは大木ですから、少々釘を打つても木は死にません。それは分かっているけど、われわれは、傷つけてかわいそうだという感覚がある。



そういつたところで仕事をしたいとは思っています。

今回のプロジェクトの作品も、いろんな要素をつけくわえるのではなく、竹と砂と石だけの構成で、それで最大限の効果が出れば、と、いつように願っています。

身体に基づくアート

「遊行のフォークロア」では、通常のアート展では考えられない、大久保氏と歩くということを目的とした。主催者側のプランとしては、大久保氏の作品展示、いわゆる一般的にイメージできる作品展があり、一緒に歩くというのは附属的なイベントとして考えた。

大久保氏から、「今回は、歩くことを目的とした」との提案があった時には、一抹の不安を感じないわけでもなかったが、かつてない試みにスタッフはもちろん、プロデュー

サーの樋口よう子氏も、未知なる展覧会に意欲をかき立てられた。

大久保氏からの希望は、毎日同じコースを歩くこと、コースは八の字になっていることというものだけ。場所にこだわらないのはなぜか、その答えは毎日歩くことによつて気づく。同じコースを歩くことによつて、同じように見える風景が、日々変化していることに気づく。同じ場所であう人の表情、木々の葉の数、道ばたの花の成長……。

場所にこだわっていなかったのではなく、私たちの周囲にはいつも自然があつて、感じようと思えばいつでも感じる事ができるのだ、と大久保氏は伝えたかったのではないだろうか。

私たちは毎日のように表現をしている。ことばであったり、表情であったり……。アートが表現活動だとすれば、私たち一人ひとりがアーティストであるというのはいさ

もつとも尊いとされたのです。

遊行というのは、特定の目的地があつて、それを目指す旅ではありません。村から村へ、町から町へ漂泊しながら、仏教の教えを説いたり、学校を作ったり、子どもがお腹が痛いといえ、薬草を煎じて飲ませたり。いまの言葉でい



えば、地域のコミュニティケアと、いいますか、そういうことを旅の途上で果たしてきました。

もうひとつ、遊行者に共通なのは、みな一流の表現者であつたといふことです。

遊行、つまり目的もなく歩き続けるというこのこと、表現する、創造することのあいだには、交錯する、重なる何かがあるのではないのでしょうか。

プロジェクトの会期中は、毎日20km、総じて140kmを歩かれるわけですが、歩くということが、人間が物事を表現していく、創造していくということにおいて、いったいどういう意味をなしているとお考えですか。

大久保 ●さまざまなおきに、歩くことと美術はどんなつながりがあるんですか、とよく聞かれますが、歩くことというのは、われわれが行動するもつとも原型的なところ

ぎだろろうか。

秋田 ●このプロジェクトのタイトル「遊行のフォークロア」、フォークロアとは、民俗伝承、民俗史というような意味で、歴史、時間を感じるようなプロジェクトにしたかったということがあります。

遊行というのは、仏教の言葉です。お坊さんが諸国を遍歴しながら、布教の旅に出る、それを遊行といっています。かつて多くの出家者は、一つの寺に定住せず、諸国を遍歴する。そして旅の途上で、生を閉じていく。そういう生き方が、



だと考えています。絵を描くというとき、筆を持って描く、鉛筆を持って描く、それと同じように歩くということを考えています。

大久保英治は歩く美術家というようによくいわれますが、約15年くらい歩くことをベースにして、その中から記憶、その土地のもの、場所性など、いろんな切り口、方法を使って表現しています。

このプロジェクトでは、お寺という空間でやるのははじめてなんです。本堂の作品に今回のテーマをみんな織り込んでいます。この建物の中で、石とご本尊が、エントランス的におしゃべりする、そういう形を、自分がこの界限を毎日20km、エントランス的に歩いている、そのつながりのなかで表現しているという、どうでしょうか。

美術的にいうと、最初は歩く場所が分からないので、いろんなところを点を探っていく。名所旧跡

街を感じ、人を感じ、そして

宝塚造形芸術大学 新美高志さん

私は宝塚造形芸術大学で映像を学んでいる学生です。今回の企画の記録映像を、クラスの友人三人と撮影させていただきました。撮影は、展覧会の前々日の石の作品制作から始まりました。大きな石を一点で立てるとい信じられない技を見せてもらい、アンビリーバーです。

愛知出身の私は、この上町台地周辺の事を正直知りませんでした。歩いてみると何十も連なった寺院にホテル街、住宅地、巨大なビル、商店街が同じ空間に存在し、凄い不思議な所という印象を受けました。

1日目、2日目は道を覚えるのと午前午後10kmずつ歩くのに精いっぱい、なかなか周りの風景や寺院などを見ることができませんでした。強烈な筋肉痛に襲われた3日目からは、ここを曲がるとあの建物がある、この公園にはキレイな花が咲いているなどがわかってきて、視野を広く様々なモノが見え始めました。四天王寺、桃谷商店街に、難波宮、軍人墓地などを一週間、毎日歩いたけどいつも見え方が違い、たった一週間だけど、ものすごい変化がありました。

植わっている大きな木もキレイな紅葉を見せてくれたかと思うと、葉も全て落ちて寂しい格好になってしまふ。これは今まで味わうことがなかったし、気がつかない。意識しないと見えてこないものかもしれない。それに気付いたのも大きな収穫でした。

大久保さんの歩くペースはとても速いんです。早歩きでスピードで10km歩いてしまうので、ほんの少し風景を撮影していると遙か彼方になってしまう。ついてくのがたいへんです。

街にはたくさんの信号があります。何度も足止めをされてしまうのですが、最初は僕には休憩できるのでたいへんありがたかったんですが、大久保さんはとても嫌がる。その理由が期間中盤にわかってきた。その頃になると自分のペースがだいたい掴めてくる。止まるという行為がしんどいし、一気に歩いてしまったほうがどんなにラクかという事です。それも新たな発見です。

歩く事で街を感じ、季節を感じ、人を感じ、匂いを感じたうえで大久保さんの作品を見ると、たぶん自分用の作品に変化するのではないと思う。共に歩き感じる事も作品なのではないかと。

この一週間はいろいろな刺激を受け、すごく濃い日々を過ごす事ができました。そこで見て感じた事を映像で表現していい作品を作りあげたいと思います。

を含めもろもろ歩きながら、それが2、3日すると記憶と体の中に入っていくという事で、点が線になる。つぎは、歩いて右側の方向が内側になる、左側が外になるというように、内外の関係が見えてくるようになり、立ち上がって空に向かって上がっていくという、点線、面、空間が体の中で展開しているという事です。つまり歩くことを通じて、時間と感覚を作っているという事です。

秋田●「遊行」ということから、もう少しうかがってきたいのですが、さっきもいきましたように、遊行者というのは歩くこと自体が目的としてある。その向こうに目的があるわけではなく、歩くことが目的化しているという事です。

大久保さんにとっても、歩くという事と、自分という自己の存在が、ぴったりはりついてあるような感覚であるのでしょうか。

大久保●そうですね。当初は美術として歩くという事でしたが、いまはそれ自体目的なところはあります。といいながら、それだけというわけにもいかないのです。美術作品を作るといっていいのですが、歩くという事と自体がだいたい目的に近くなっています。

今回も、昨日くらいからはただ歩くだけの方が気分的にはうれしい。その方が気分的には「やっている」というふうになっていま

大久保●歩いてる途中で突然生まれてくるんじゃないかと、いろいろな要素を持ち込みながら歩いているのです。今回は少し違いますが、たとえば、歩いていく先が、100kmくらいあるときは、最初のうちは、日常的なことが思い巡ります。あれ、あいつ腹立ったよなあ、とか、

あの人はきれいだったなあ、とかね、そういうことを思いながら歩いていくわけです。それがだんだん歩くうちに昇華されてきて、どんどんなくなっていく。考えること自体がなくなっていくわけです。

突然、自動車の音とか、風が吹く音とかを聞く、というか体感す

ることによって、ふと我に返る瞬間がある。そういうことを通過していく中で、木の葉が重なっている光景とか、草花のかわいいものとかがフッと目に飛び込んでくる。そういうものが自分の中にたまってくる。記憶としてたまる。そこで、ある地点に行ったとき、そこで作



すね。

秋田●遊行者たちが、たとえば一遍が踊り念仏、西行や田空がさまざまな表現をする。あの表現というのは、お客さんを対象としているというふうには感じにくい何かがあるわけですね。

「自然」というものについては、大きい主題の「つ」として、またうかがいたいのですが、歩くことを通じて、自然なるものとの交感というか、スピリチュアルなものと同じようなことによる発現といいたし、その果実として歌やパフォーマンスが生まれてきているように思えるのです。

彼らが書齋にこもって作ったのじゃなく、歩くという行為のプロセスのもとでそれを産み落としたという事は、歩く中に創作する精神という衝動が募っていく、高まっていくということがあるのでしょうか。

見えないものが見えた

應典院小僧インターン 日高明さん

今回の遊行のフォークロア、私は全日程に参加することはできませんでしたが、100kmに近い距離を歩きました。はじめは写真を撮るために周りの風景に気を配りつつ、いい被写体が見つければカメラに取めてまたすぐに歩き始めるのですが、なにしろ大久保さんの歩行スピードは並みの倍はあります。一旦離れるとなかなか追いつかない。途中からは写真はいまほどほどに、歩くことに集中せざるを得ませんでした。

100km歩けば風が見える、と大久保さんは言いました。見えないものを見るようにする、とも。遊行初心者の私には、一体それがどういふことなのか最後まではっきりとは理解できませんでしたが、大久保さんの意図に合ったものかどうかかわからないながらも何となく想像していました。普段私たちは風をたいてい肌で、触覚で感じます。温かい、冷たい、強い、弱い……。しかし風はその他さまざまな表現を持っている。煙がたなびくのを見て風の吹く方向を知り、路面の枯葉が渦を巻いて舞い上がるのを見れば、何かの生き物のようにも見えます。そして風は私の耳の傍でひゅうひゅうと騒がしく、時にささやくように音を奏でたり、歩きつかれた私たちのお腹をさらに空かせるために、うどんやカレーの匂いを運んできたりもします。風は私たちが普段思っているよりも多くの表情を持っている。それに気付こうとするのは、自然を私の対象として一義的に決定し征服してやろうとする人間中心の考え方ではなく、自然に抗わずにむしろそれらと対話するという謙虚な姿勢を要求するのではないかと思います。

思えば今回の期間中本堂ホールに毎朝立てられた石も、非常におもしろいものでした。15分、20分とかかる日もあれば、ものの1分ですんなりと立つ目もある。石が立つ瞬間は傍から見ている、「そろそろ立つのでは」ということが何となく分かります。石がひとりりに立とうとし始める、と大久保さんは表現しますが、さもありません。石は全くの無機物でありながら、私たちの感じ方によってはあたかも生きてるようにも見えます。期間中何度もホールに아가って柵の外に座り、その危うく起立した石をじっと見ていました。すると石がゆらゆらと揺れているように感じられます。おそらくそれは、石が倒れないかという私の不安と、心臓の鼓動などの身体内部の働きによる私の視点の微妙なブレとのために引き起こされたものかもしれません。そのような理屈を考えながらも、それでも私にとってはどうしてもその瞬間石がひとりりに揺れているように見えたのです。普段はまったく気にとめることもない石が、表情を持った瞬間でした。

自然を単に物としてのみ捉え、それを人間が削ったり加工したりするのは、ひとつの表現技法です。しかし自然の表情を感じ取り、それに逆らわずに少しだけ手を施すことで調和を図る、そういった表現もアートの重要な側面ではないかと感じました。

に、記憶としてたまる。そこで、ある地点に行ったとき、そこで作品を創りたくなったときに、その記憶がもう一度戻ってくる……」

僧侶の世界でも俗世と離れ、ひたすら修行に励む中で、ある境界を越え、仏の世界に近づくといい。また、スポーツの世界でも同様に、

トレニングで身体的疲労が極限に達したとき、真の技術が身につくといわれる。

期間中、延べ159人の方が大久保氏と一緒に「遊行」をした。

「ただひたすら歩くことが、こんなに楽しいことだと思わなかった」

異口同音に参加者から、こんな

声が聞かれた。

大久保氏のいう、「風が見えた」かどうかはわからないが、多少なりとも自分の周りのいのちの存在、景色に敏感になり、自らの中に潜む、アートの感覚が芽生えたならば、このプロジェクトは成功だったのではないだろうか。

秋田●ただひたすら歩くことで、

もうちょっと平易な感覚では、歩くときに、あの神社はこれこれこういふところと前もって知っているより、歩いたあとから、あそこはなんだったんだらうと知る方が、その人にとつての幸せは倍増すると思うわけです。だから、ただひたすら歩きますと、いっしょに歩いてくれる人には申し上げているわけです。

無意識の世界へ

大久保氏は「風が見える」という。「100kmくらい歩くとき、最初のうちは、日常的なことが思い巡りまです。それがだんだん歩くうちに昇華されてきて、どんどんなくなっ

てくる。考えること自体がなくなってくるわけです。突然、自動車の音とか、風が吹く音とかを聞く、というか体感することによって、ふと我に返る瞬間がある。木の葉が重なっている光景とか、草花のかわいものとかがフツと目に飛び込んでくる。そういうものが自分の中

品を創りたくなったときに、その記憶がもう一度戻ってくる。そういうことが多いわけです。

秋田●普段見えているものが、違う見え方をしてくるといふことですか。

大久保●そう、違う見え方をする。歩くといふことは、ものを見るために歩くんじゃないかと、歩いていっているうちに、自ずとして求めているものはあとからついてくるように思えるのです。

大久保さん以外の人にも、何か違う自分の感覚感みたいなのを啓くことはあるのでしょうか。

大久保●ぼくはそういうふうには信じているわけです。ぼく自身、最初からそうなるだろうとわかかって歩いていくわけではない。歩くうちにだんだんそういうことが分かってきたので、経験でいえば、みなさんそういうふうになっていくだろうと思っているのです。

秋田●頭でわかることではないですよ。

大久保●そして絶対的に時間が必要です。



「遊行」が心に残したものは……

「遊行のフォークロア」プロデューサー 樋口よう子

熊蟬の泣き声が、降るように浴びせかかる。しつかりと日傘を握り締めつつ、したたる汗をぬぐう手は、休むことがない。地球温暖化のためといわれる、希に見る猛暑。もしかしら、気温は体温より高いかもしれない。しかし、心地よささえ感じるのは、何故だろうか。應典院を出発し、高津神社から、玉造神社、天王寺七坂を上り下り。清水寺で滝を眺めてお茶をいただき、一心寺でちょっと息。改めて、上町台地を歩くと、今まで気付かなかったものが見えてくる。

今日の主役は、美術家、大久保英治氏。折しも、西宮市立大谷記念美術館で展覧会を開催中。四国八十八カ所を巡礼し、制作した作品などの数々。わたしが拝見した時は、木の枝で、天井5メートルいっぺいの大きなドームのインスタレーションを公開制作中、木のいい香りが、展示室いっぱいに漂っていた。その多忙な中、2005年の12月に開催する應典院での展覧会の思索にやってくるのだ。

「今回の作品は、まちを『歩く』ことにする」彼は、展覧会企画メンバーに対して、そう

断言した。

「作った作品は、もうわたしの中では、過去のもの。記憶の断片でしかない。ここで、作品を発表するのだから、美術館ではできないことを、わたしがライフワークにしている『歩く』ことをこの上町台地でしたい」

数カ月後の、しかも関西での展覧会なので、西宮市立大谷記念美術館と同じことをしても意味はない。彼の真骨頂といえる『歩く』ことで、出会う何か、を参加される人々に感じてもらうことは、とても意義のある興味深いもので、プロデュースするわたしの心を躍らせてた。ただ、「まちを歩く」ことが、どうして作品となるのか。歴史ある上町台地を巡る町歩きとどう違うのか。身体のために歩きたいわゆるウォーキングとの違いは？そして、わたしもかつて、モダンデ平野で毎日行なったアートツアーとの差異はいかに。

この展覧会を成り立たせるためには、まず、主催者の理解と観客の反応の予測であろう。会場は、美術館ではない。観客は、主に上町台地に住むまちの人々である。それでなくと

のを拒む。息を止めてじつと見つめる人々の目も真剣だ。それは一瞬で、まばたきするのも借しい気がする。緊張がみなぎる中、岩はそれが自然なごとくフツと立つ。ホツという安堵とともに思わず拍手が舞い上がる。岩は御本尊と対峙し、その一日の安全を祈るかのようだ。凜とした神聖な空間が我々を圧倒する。

午前10キロ、午後10キロ、二日二回、ひたすら歩く。應典院を皮切りに、午前、上町台地の南半分、午後は北へ。普通の人の歩く速度は、時速4キロ。上町台地のアップダウンを時速5キロは速い。人に抜かされることは、いつものことながら、人を追い抜かすことなどあった試しがないわたしは、ついていくのに必死である。目頃の運動不足を後悔しつつ、ただひたすら足を前に出す。

真言坂から、生国魂神社、源聖寺坂を下り、JRのポスターで竹内結子が出演した口縄坂を上る。かわいい猫がポーズをとる。愛染坂を下りて、水が湧き出る清水坂へ。急に眼下に広がる眺望は、夕陽を愛でた昔を忍ばせる。天王寺公園を通り、朝帰りのカップルを横目に、四天王寺で休憩。夕陽丘から桃谷商店街を抜ける。そろそろお腹がすく頃。追い打ちをかけるように鶴橋商店街の焼肉の匂いがとどめを刺す。大阪赤十字病院の坂を上がり、ホテル街を通り、應典院に。

足を投出し、お昼の休憩。ただし、大久保氏は拾った落葉で作品制作。

今度は高津神社で記念撮影。惣から、人情味のある小道に入り、登り坂の空堀商店街へ。熊野街道を通り、背割下水のある南大江小学校から、国立大阪病院の坂を上り、難波宮跡でちょっと休み。氏は、ここで毎日土を採集する。聖マリア大聖堂へゆるやかに下り、玉造を抜け、真田の抜穴跡のある三光神社へ。階段を上れば、陸軍墓地の墓石が整然と広がる。細い木戸を半身にし、真田山小学校からまた上る。木に鎌が何本も突きささった鎌八幡を横目に、近松門左衛門の墓へ。谷町筋から中寺町に下り、千日前通の坂を下って予定終了。師走のまちを駆け抜けた心地よさで、体もポカポカ。疲れが襲う。大久保氏は、拾った落葉で作品制作。苦労様。岩を横にして一日が終わる。

何の案内もなく、ただひたすら歩くので、まち歩きと勘違いされた方は、約1名。予想に反して？ たくさんの方が参加され、ほぼ全員が、満足されて、気持ちのよい体験をしていた。半年近くの試行錯誤の日々と周到な準備、熱心なスタッフの賜。最も心配された記録も宝塚造形大学の学生さん達がビデオで毎日歩くというより、走りながら撮影してくれた。努力と熱意に頭が下がる。

また、大久保氏と手幹・秋田光彦氏とのトークショーは、凛然と立つ岩のインスタレーションの本堂で行なわれ、宗教と芸術についての熱い対談に大勢の聴衆が聞き入った。

も、現代美術はあまり一般的ではない。高度な美術理論を要する『歩く』という行為が美術作品と人々に認められるのが、最大の難問であった。

懸念するあまり、「参加者に歩いた後の感想や、写真を展示しては？」と、大久保氏に提案した。

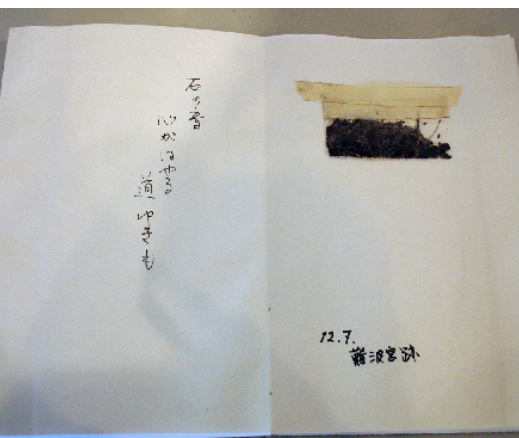
「ワークショップ的なものには必要ない。わたしが歩き、視て、感じたことを形にして残す」と、掃かれた。その潔さに感激しながらも、一抹の不安を覚え、「百人のうち一人でも感動してくれば充分という作家の姿勢です。本当にそれでいいのですか」思わず主催者である應典院に念を押した。

●
あの目眩をするような暑さは何処にいったのだろう。いつの間にか御堂筋の銀杏も色付き、あわただしい師走がやってきた。ただでさえ気ぜわしい大阪はスピードが一層速くなったように感じる。

岩を立てることから、それは始まる。円形の本堂のドアを開けると竹の清々しい香りが漂う。垂直に立てられた竹の円い囲いの中に敷かれた白い小石。中心には、横たえたどつりした岩。その上に70センチ高の50キロ近くありそうな岩をたった一点で立てる。持ち上げるのも素人では困難な岩は、時によりスツと、まるで魔法にかかったように。しかし、日によっては小時間かかるほど岩は立つ

美しかった銀杏は葉を落とし、二面の黄金の世界。コンクリートの歩道さえ、踏みしめられた落葉が、色を残す。いつもの所で、同じ人と出会い、新しい年に向けて、家の装いも少しずつ変わる。坂が上がって、下がって、無心でただ歩くことは、素直にものが見えてくる。まぢや自然、そして、自分自身。上町台地を駆け抜けた日々は、それぞれの心の中へ何を届けたのだろうか。

落葉と土で描かれた絵が増えていく。それをトレースする観客の絵も厚みを増す。最終日、岩は寝かされた。





秋田光彦主幹から……

2006年

呼吸するお寺・應典院の、9月〜12月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

9月

- 5日：名著「仏教とインターネッ
ト」の著者、浄土真宗本願寺派
の釈宗善さんと会食。若き学僧
でNPOの介護施設も経営され
ているのが、意気投合。
- 11日：NPO政策研究所主催の千里
フォーラムで、「持続可能」をテ
ーマに上町台地のまちづくりを語
る。京大の植田和弘教授が主。
- 13日：大阪府住宅局の呼びかけで
「上町台地マイルドHOPEン
」準備委員会発足。天王寺区
内の代表的NPOが集まる。
- 16日：映画「カーテンコール」の

特別先行鑑賞会をリサイクルホ
ールで。お寺や幼稚園関係の方々
20名を前に挨拶を述べる。

- 22日：新世界のコルムで「仏法
のお庭第2回。読経と法話を行う。
- 23日：應典院1階に念願の十二面
観音菩薩像を安置、開眼式を執り
行う。総額308万円の募財をいた
だく。ありがとう。20名超の感想を
上回る檀家さんのご随喜が。上田
假奈代さんの詩の奉読もよかった。
- 27日：総研の小委員会がスタート。
次代のリーダーの若手園長たちと
1泊2日の集議は心地よかった。
- 30日：映画「カーテンコール」の

と80名の家族たちの参加。

- 16日：NHKのETV特集のテレ
ビ取材。上田犯行さんと3時間
に及び対談取材は疲れました。
夜は大阪名物の粉モノで盛り上
がる。撮影は1日一杯まで。
- 20日：大連守十夜法座。午後「ま
ちの学校」コリアタウンへ。韓
国宮廷料理のワークショップ。
- 22日：来年開催の石井聰互監督作品
上映会の実行委員会を開催。顔が
れも濃いメンバー6名が集まる。
- 24日：大阪アートカレッジ・スコ
ールのオープニング。記者発表と
かパーティーとが、なんだか立
派すぎる感じもするが。
- 26日：大阪商業大学のシンポジウ
ムに参加。東大の神野直彦先生
の講義を拝聴。夜はたんぼぼの
家の播磨さんらと間もなく設立
される「アートイン・ヘルスケア
学会」の構想について意見交流。

12月

- 5日：應典院本堂で、美術家大久保
英治さんの作品創りこみが始ま
る。竹と石と砂、笹など自然素材
を使った大久保さんの「ランドア
ート」がご本尊と対峙した。
- 6日：日経新聞の取材。若者たち
の生き方支援について。
- 7日：京都の大本山百万遍知恩寺に
服部法丸君と普山。随喜させて
いただき。大久保英治さんの「遊
行」開始。夜は「アーツなお仕事
カタログ」ダイアログに出講。
- 8日：午前の部を大久保さんと歩
く。同行ビデオ取材を玉塚造形
芸大の学生たちが。池野くんは
全行程、歩きぬへらしい。
- 10日：カレイドのダイアログ「自
適人のススメ」。阪大の海美公秀
さんと。肝心のコーディネート
ーさんが大遅刻で、まいった。
- 11日：大久保さんと應典院で対談。
芸術と宗教の境界を一人で自在
に語り合う。NHKの取材。
- 12日：国際交流基金から外国人キ
ュレーターたちが大久保さんの
作品を見学。日本の寺のあり
かたについて、説明する。

10月

- 一般試写会。上映前に、京都シ
ネマの神谷雅子さんとトーク。
- 3日：阪大コミュニティシヨンド
サイン・センターの西川勝特任
助教と「サリュエ」の対談取材。
Lマカジン取材受ける。
- 4日：ぴあフィルムフェスでなつか
しい78年の8ミリ映画の名作「突
撃！博多愚連隊」を鑑賞。確か私
は初めて宣伝を担当しました。
- 6日：より10日まで、源聖寺さま
40年ぶりの五重相伝に執持とし
て出勤。受者総勢124名は汗巻。
- 7日：来年の総研研修に講師招聘
のため立命館の川本八郎理事長を
訪ねる。夜は映画「カーテンコー
ル」完成披露試写会。佐々部清監
督や主演の伊藤歩さんと痛飲。
- 14日：新大阪で映画監督の石井聰
互さんと面会。来年の上映会の
企画について意気投合。
- 17日：社会福祉法人光聖会（理事

長は弟の光哉）経営の運美ナ
サリー北千里保育所の地鎮式に
参列。来年6月に開園の予定。
午後は浄土宗の法然上人800年遠
忌委員会へ企画を述べる。

- 18日：大阪青少年教化協議会の30
周年記念大会に参加。奈良康明
先生の記念講演。
- 26日：総研の役員会を有馬で開
催。総研の将来構想など、なが
なが煮え切らない議論。1泊2日。
- 29日：ホスパ主催の療育環境フォ
ーラムを應典院で開催。2部の
ワークショップの進行を務める。
- 30日：ワンコリアフェスティバル
とからほり・まちアートの同日
開催。ご法事とお通夜の合間を
縫って結で行われた「上町台地
アートリズム」に顔を出す。

11月

- 1日：新世界アーツパークのシン
ポジウム「パブリックビジネス」
のフォーラムに参加。
- 13日：大久保英治展案内。搬出のあ
と、朝鮮料理で打ち上げ。それに
しても、じつに濃い1週間。二度
しか歩けなかったのが心残り。
- 14日：高知の日赤病院に太田富美
先生をお見舞い。
- 17日：大阪市「住むまち。上町台地」
のシンポジウム。まちの当事者と
してコメント。夕方からカレイド
のファイナルに参加。アートNPO
の今後について意見。
- 18日：岸和田市の地域協働いき
きネットの大会で記念講演を述
べる。大阪府土木局主催。
- 20日：アートイン・ヘルスケア学会発
会イベント。学会長に阪大の鷲田
清一先生。私は副理事長に参加。
- 21日：同志社大学大学院のソーシャ
ル・イノベーション研究コースの
開設プレセミナーに参加。應典院
との今後の連携が楽しめた。
- 28日：御用納め。應典院の床をひ
たすらワックスかけ。
- 31日：除夜の鐘。今年も無事終了、
お疲れさまでした。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第58回 4月20日(木)
「街頭紙芝居のおばちゃん子どもを育む」
話題提供者：古山千賀子さん(街頭紙芝居師)

第59回 5月18日(木)
「生きるとは夢を持って歩き続けること」
話題提供者：奥塚明さん(街頭紙芝居師)

第60回 6月15日(木)
「再びいのち生かされて」
話題提供者：南吉一さん
(「在宅ホスピスあおぞら」主宰・医師)

第61回 7月20日(木)
「野宿から立ち直って」
話題提供者：よがふくさん
(NPO法人BMG社会福祉サービス監事)

※いずれも第3木曜日18:30~21:00まで
参加費1,000円

サイエンスカフェ

コーヒーを片手に科学を語り合う場、全国初となる寺院での開催です。

「宇宙航空材料から骨疾患診断・治療へ：自由な発想と役に立つ研究」
○日時：2006年4月22日(土) 14:00~16:00
○話題提供：馬越 佑吉氏(大阪大学副学長 日本学術会議会員)
主催：日本学術会議、日本科学技術振興機構、NPO法人サイエンス・コミュニケーション(サイコムジャパン)
共催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、文部科学省、應典院
協力：日本科学未来館

★お問合せ・ご予約は……
應典院寺町倶楽部
FAX 06-6770-3147
メール info@outenin.com

コミュニティシネマ

應典院コミュニティシネマ、6月に2回開催します。
どうぞご予約ください。

應典院コミュニティシネマ VOL.4
「ダライ・ラマの般若心経」

仏教最高の経典のひとつ「般若心経」の心を、世界で最も著名な仏教者・ダライ・ラマ14世がカメラに向かって分かりやすく解き、インド国内の仏教的生活を送るチベットの人々を訪ね歩く秀逸なドキュメンタリー映画「ダライ・ラマの般若心経」上映。上映後は文化人類学者・上田紀行さんがグローバル仏教の未来を語るトークショーがあります。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

- 日時：6月3日(土) 13:00 開会
13:30~14:40 映画「ダライ・ラマの般若心経」上映
15:00~16:30 上田紀行さんのトーク
*終了後、ゲストを囲んでワンコイン交流会があります(500円)。
- 参加費：1,800円(一般)
1,500円(会員・学生)
*参加予約はメール、FAXで受け付けます。定員100名になり次第、締め切ります。申込予約多数の場合には当日入場をお断りすることがあります。

主催：應典院寺町倶楽部
共催：(特活)アユース関西・(財)新日本宗教団体連合会大阪事務所
後援：大阪府仏教青年会・大阪市仏教青年会・大阪青少年教化協議会
特別協力：フライングジブ・第七芸術劇場
協力：(特活)こえとことばとこころの部屋・(特活)ピハ-ラ21・
(特活)関西国際交流団体協議会・(特活)関西NGO協議会

應典院コミュニティシネマ VOL.5
「日本の80年代自主映画のパースペクティブ
~石井聰互・監督生活30年の閃光~」

上映会に先立ち事前企画を開催!

- 日程：6月23日(金)~25日(日)
詳細は次号にて!

「ISHII SŌGŌ DŪVŌ-BŌX VOL.1」発売記念トークライブ
石井聰互プレ大阪
4月26日(水) 18:30開場 19:00開演
料金：前売・2,000円 当日・2,500円(ともにドリンクつき)
会場：ココルーム(新世界フェスティバルゲート4階)
主催：NPO法人こえとことばとこころの部屋(06-6636-1612)
共催：石井聰互監督初期作品上映会実行委員会

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.47

編集後記

子どもたちの成長を祝福する「七五三」、この言葉は今、若年労働者に用いられているという。すなわち、新規学卒就職者のうち中卒の七割、高卒の五割、大卒の三割が3年以内に退職する実態を指す。離職後は、再就職先を見つけにくくフリーターを続けざるを得ないケースが増えているのだとか。「継続は力なり」「石の上にも3年」とはよくいったものだが、早期退職を繰り返すと必要な仕事の技術が身につけにくいということが問題視されているのだろう。

「自適人の肖像」展を通じて様々な仕事人に出会った。専門性を生かしながら、社会に必要とされることを仕事にしたり、仕事の内容をマイナーチェンジしたり、そのしなやかな生き方は魅力的だった。そんな自適人の姿を消化し、カタチにした作家もまた、専門性に富んだ優れた技術者だといえるのではないだろうか。

さまざまな職業体験を確実に積み上げて、人とのかかわりの重要性をお話された岩浅さん。若年者だけではなく、職業生活で培った特技を社会に還元する経験豊かな高齢者の活躍が期待される。そのために「自分は何のために誰と生きていくのか、という問いこそだいじ」だ。

職のみならず、くらしを取り巻くまちからも学べることはたくさんある。戦後60年の節目の今年、大阪の戦跡を巡るという着想から始まり、力まずに訪ね歩くことを目指した「アートなまちの探検隊」。かつて大規模な空襲がほかでもない私たちの住むこの大阪にあった、という事実に触れたかった。「地域資源としてまるごと取り扱ってみればより未来志向で過去の行為とその結果を取り合うことができる」のではと。

何かを「探検」することを意図したこの企画をさらに抽象化し、ただ歩くことでも何かが見つけられるのではないかと。基、見つけ出すことさえも目指さなくてもよいのではとまちに挑んだのが「遊行のフォークロア」だった。「遊行者」には、目的を持って行動することから外れる感覚を堪能、自由にこころを遊ばせる感覚にひたっていただけではないだろうか。

気がつけば、六地藏前の桜の開花を目にするのも今年で6度目。まささらなランドセルの小学生が来年は中学生になる。わが身を振り返る春である。

(大塚郁子)

- 発行日
2006年3月15日
- 編集人
秋田光彦
- スタッフ
池野 亮光
大塚郁子
田中いずみ
城田 邦生
- 発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147

飲食に 量を 知る者であれ

善い友だちと交われ。
人里はなれ奥まった
騒音の少ないところに坐臥せよ。
飲食に量を知る者であれ。

「スッタニパータ～ブッダのことば」

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.47

Top Interview

市民による

安心して暮らせる地域づくり

.....
1

特集：第3回大阪・アート・カレイドスコープ

「do art yourself」展

.....
4

第3回大阪・アート・カレイドスコープ

アートなまちの探検隊

まちの彩りを紡ぎ出し発信する

.....
6

意味・意義

第3回大阪・アート・カレイドスコープ

自適人の肖像展

出会いから、表現・地域・仕事を問う

.....
12

第3回大阪・アート・カレイドスコープ

遊行のフオークローア

アートとスピリチュアルの交錯

.....
18

140kmの彼方に見えたもの

秋田光彦主幹から

てんてこまい

.....
30